ネスティングラックで物流の合理化に貢献。ロボット溶接技術にも磨きをかける技術者集団。

かつては脚立や農業用一輪車、建築足場など、鋼管を使った多様な加工品を製造販売していたが、バブル崩壊でいっきに業績不振に陥った。一時は倒産の危機にあったが、ここから巻き返しが始まった。景気に左右されにくい物流業界に着目し、溶融亜鉛メッキの物流機器の製造に特化。以来、業績は右肩上がりに伸びている。

堺技衆 認証番号0111

代表取締役社長　新川　源洪さん

株式会社 新川製作所
〒599-8242
堺市中区陶器北98-2
TEL　072-234-2261
創　業　昭和33年2月
資本金　1,300万円
従業員　17名
http://shinkawa-g.jp/

物流機器への一本化と効率化でわずか2年で企業再生に成功。

平成16年頃、当時専務だった新川社長は、本気で廃業を考え始めていた。鋼管の加工品の大半は海外へ移行し、さらに取引銀行が破たん。土壇場に追い詰められたその時、債務を引き継いだ整理回収機構が「元気出せ大阪ファンド」への挑戦を勧めるとともに、中小企業診断士の井上敬三氏を紹介してくれた。井上氏にこれまでのやり方を全否定され、大きなとまどいを感じた新川社長だったが、「どうせ廃業するのなら、言う通りにやってみよう」と物流機器に一本化することを決意。製品を絞り込むことで回転率がよくなるだけでなく、受注生産の多い物流機器は安価な輸入品に取って代わられるリスクも少ない。難しいと思われた財団法人大阪産業振興機構の支援を受けることが決まり、いよいよ本格的に企業再生が始まった。当時の工場内は、機械、在庫品、部品、廃材などで埋め尽くされていたが、そのほとんどを処分。中には最新鋭の紛体塗装機も含まれていたという。さらに固定費を1／2にするために役員報酬をカット。新川社長と当時の工場長（現専務）の妻は事務担当に駆り出され、溶接や塗装の単能工たちはいろいろな技術に精通した多能工となることを求められた。総力あげての再生計画は思いのほか順調に進み、2年目には売上高が2倍に。大阪産業振興機構の支援が終結したのは、予定より早い2年後だった。

最新鋭の溶接ロボットを独自のノウハウで最大限に活用

高品質の製品づくりを支えるスタッフたち

溶融亜鉛メッキ鋼管を使った「エコテナー」を次代の常識に。

主力製品は、ネスティングラックやクロスサポーターなど、パレット保管用物流機器だ。業界内で最も流通しているのは焼き付け塗装品だが、使用していくうちにサビによって腐食したり、塗膜が剥がれ落ちたりすることがある。株式会社新川製作所では、耐食性が高く、サビや剥がれ落ちの心配がない溶融亜鉛メッキ鋼管を使ったネスティングラックを量産。「エコテナー」という商標で製品化している。従来、塗膜の厚い亜鉛メッキの鋼管は溶接ムラが起きやすく、ビード（溶接跡）を素早くきれいに仕上げることが困難な素材と言われてきたが、同社はロボット溶接機が登場して間もない昭和54年からロボットを導入し、高度なティーチング技術を蓄積。溶接状況に応じた治具選択、スパッタによるダメージ低減など、独自のノウハウにより美しい仕上げを実現している。また1カ月に使用する200トンもの鋼管は、コイルの段階から手配した別注品。全てを自社で切断し、プレス、溶接、塗装までをこなすのも同社ならではだ。現在は新川常務を中心に品質管理委員会を発足し、ISO9001の取得に向けて準備をしているという。業績好調の理由について新川社長は、「品質だけでなく、納期を絶対に守る姿勢と実践が信頼につながったのではないか」と分析する。次の目標は、焼き付け塗装品が9割を占める物流業界で、亜鉛メッキ品を常識にすること。同社の勢いは止まりそうにない。

溶融亜鉛メッキ鋼管
ネスティングラック「エコテナー」

広いストックヤードには塗装品も